たまには目をやれウワミズザクラ

おたまじゃくしがお弔い

たわわに実ったクワ（右）、オオシマザクラ（左上）、ビロードイチゴ（左下）。野鳥たちのおこぼれを私たちもいただく

「人はみな　ソメイヨシノに　群がりおれど　たまには目をやれ　ウワミズザクラ」とつぶやきながら、五月初めに咲いた真っ白いウワミズザクラを見上げていました。七塚原高原には自生のウワミズザクラが多く、とっても清楚な花を咲かせます。五月下旬の今は青い実をびっしり付けています。杏仁子（アンニンゴ）漬けにするにはちょうどいい時期かなあと無粋なことを考えています。

七塚原高原は百花繚乱の季節を迎えていますが、早春に咲いた草木はその実が熟し始めています。ビロードイチゴ、ナガバモミジイチゴ、クワ、オオシマザクラの実が食べ頃になっています。この方は、山菜と違って人間があまり興味を示さないので小鳥たちが安心してついばめます（私も）。折しも小鳥たちの繁殖期か、早朝から夕方まで呼び合う声が騒々しい。三月中は甲高い声が直接耳に響いていましたが、森が緑に覆われてくると森のなかから反響するように聞こえてきます。ウグイス、サンコウチョウ、ホトトギス、ホオジロ、シジュウカラなどが一日中鳴き交わしています。

一方溝では、三月一日に産卵していたヤマアカガエルの卵が、三センチメートルほどのおたまじゃくしに育っています。一時期は溝が真っ黒になるほどオタマジャクシがいましたが、今は適当に分散してきている、というより自然淘汰されています。

昨日、畑のそばの溝を覗いてみると、十匹くらいのオタマジャクシがきれいに整列しているのです。何事やあらんとよく見ると、親ガエルのお弔いをしていたのです。ずばり言えば、死んだ親ガエルを食べていたのです。自然界の掟（おきて）は厳しいものだなあと思いました。かくして自然界のバランスは保たれているのです。

（NPO法人七塚原自然体験活動センター　理事長　西村清巳）

オスが卵を温め、子育て

メス中心の、一妻多夫で繁殖

「コウ、コウ、コウ、コウ・・・」深夜の水田地帯に響く、不思議な声。声の主はタマシギという野鳥です。体長二十センチメートル前後の小さな鳥で、広島県では一年を通して見ることができます。しかし、非常に臆病であるだけでなく、最近は数が減ってきており、姿を見る機会は少なくなってきています。

一般的に、鳥をはじめ、野生の生きものは、オスのほうが鮮やかだったり、綺麗に鳴くことができたりと、イメージしがちですが、このタマシギは、メスのほうが鮮やかで、かつやや大きいです。繁殖方法も変わっており、一妻多夫で、メスが複数のオスに対して求愛するのです。両翼をピシッと垂直に立て、オスを誘うその姿は圧巻です。また、メスは巣に産卵すると、さっさと立ち去り、オスが抱卵・子育てします。代かき前後の田んぼなどで繁殖をすることから、常に撹乱と隣り合わせの生活をしており、個体数の多いオスに分散させて子育てさせることが、確実に自分の子孫を残すことができるため、このような繁殖形態をとるようになったと言われています。

近年、稲の生産調整が強化され続けている一方で、転作奨励金に向けられる予算額は減少の一途をたどっています。転作奨励という手法の限界から、休耕田や耕作放棄の問題が顕在化し始めている中、放棄水田で本種を見かけることがしばしばあります。手入れのされた開けた水田より、草がある程度茂った場所のほうが落ち着くのでしょうが、皮肉な話でもあります。

田んぼを取り巻く環境は、稲の生産に限ったものではなく、多種多様な生きものたちを育む場でもあります。〝循環〟というキーワードにタマシギもまた直面しています。タマシギが累々とその命を繋ぐということは、他ならぬ私たちが〝健康な〟田んぼを残していく必要があるということです。

（地域活動支援センター　原　竜也）

鳴いて縄張りを宣言するメス（上）と、育児中の子連れオス（左）

静かなる侵略者タイワンシジミ

認識不足が招く在来生態系の危機

食用や釣りの対象魚として日本に持ち込まれ、その後放流によって全国に広がったブラックバス。ペットとして飼われていたものが放たれ、各地で増加しているアライグマ。いずれも食欲が旺盛で繁殖力が強いため、日本の在来生態系に深刻な影響を与えています。

このような、生態系への影響を引き起こす外来種の中で、近年「サイレント・エイリアン」と呼ばれる生物が注目されはじめています。北朝鮮産アサリに混ざって入り込んできたサキグロタマツメタという巻貝のように、輸入産物にまぎれて侵入し、気が付いたときには大繁殖していたという外来種です。しかし、このように意図されずに侵入した外来種とは別に、輸入される魚介類や農作物そのものにも、静かに、そして急速に日本の在来種を駆逐して侵略しつつある生き物がいます。

その代表種がタイワンシジミです。中国大陸から食用に輸入されていますが、売れ残りの投棄や家庭の台所からの稚貝の流出などにより、全国の川や水路で増加しています。タイワンシジミは繁殖力が強く、侵入すると三～四年で在来のマシジミを駆逐して入れ替わってしまいます。在来種を食い荒らすといった目に見える被害が少ないため、この侵略は気がつかないうちに進んでしまうのです。大量に増えるので、川底に棲むほかの生きものが棲めなくなる、未知の病原体がいっしょに広がるといった問題も危惧されています。困ったことに外見がマシジミと非常によく似ているので、タイワンシジミと認識されずに対応が遅れているのが現状です。

最近、都市近郊の農村地帯に行くと、「水がきれいになったので水路にシジミが増えた」というお話をよく聞くようになりました。しかしその実態は、なにをしでかすか分からないよそ者の〝静かなる侵略〟の始まりかもしれません。

（生物調査課　中西　毅）

タイワンシジミの貝殻。淡色タイプ（左）とマシジミに酷似した濃色タイプ（右）

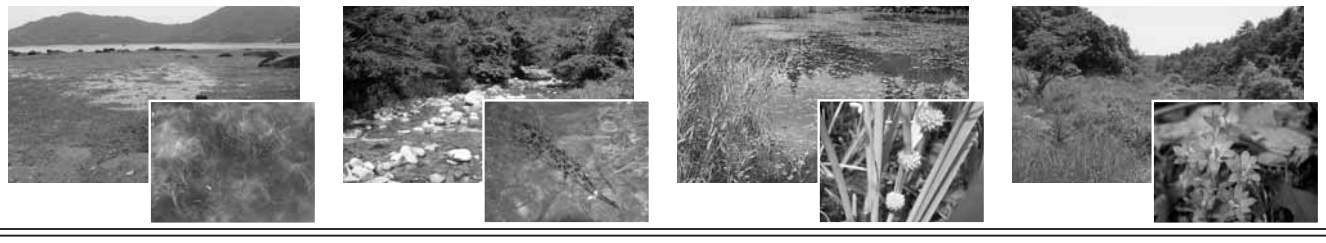
生物調査事業

さまざまな人間活動や生活様式の変化により、近年地域の生物が減っています。豊かな自然は私たちの暮らしにとってなくてはならないものです。当協会では、身近な自然を知り、大切な生き物を守るための生物調査事業を行っています。

地域の自然を知る
陸上生物・水生生物・海域生物調査

大切な生き物を守る
野生動植物保全対策調査

失われた自然を取り戻す
自然再生計画立案・実施



実施の枠組み
住民や行政・事業者の自然との共生の取組みを生物保全の専門家としてお手伝いします。

住民 → 自然との共生 ← 行政・事業
↑　↑
（財）広島県環境保健協会

問い合わせ：
財団法人広島県環境保健協会
企画開発センター業務開発課／生物調査課
電話：082-293-1517（ダイヤルイン）FAX：082-293-8915